

## あ と が き

第12号は平成6年春に、山口教授退官記念号として発行されるはずであったが、結局、木内先生と山口先生との追悼号として1年遅れとなった。またこの号をもって、従来のスタイルによる「人文科学科紀要、人文地理学」という紀要の名称、編者としての教養学部人文科学科も変わるものとなるので、その意味では最終号となる。しかしスタッフは、名称の一部は変えても、第13号以下を刊行し続ける決意である。本号をもって、予算委員会から直接配分される紀要発行費は廃止される。長年のご助力を感謝する。

この一事でも分かるように、駒場は大変革のさなかにある。大学院では、駒場の講座が、理学部の改革にともなって理学研究科の基幹講座からはずれ、総合文化研究科広域科学専攻広域システム科学系に属する、通称人文地理学研究室となった。これにともない、過半の人文地理学系大学院生は広域システム系に移籍された。理学系に残った若干の人文地理学系院生も、実質的には広域システム科学系のカリキュラムをこなす、駒場の教官の指導を受けている。当分は混交状態が続くものと思われる。

後期課程では、教養学科人文地理学学科が1995年で創立40周年を迎えた。7月には人文地理学会特別例会を駒場で開き、記念事業の一部とさせていただくこととした。この教室の記録を、1期生以後、全卒業生を知っているただ一人の生き証人として、田辺が駒場を去る前にまとめることにしたい。40期生の卒業する97年春が目標である。後期課程の改編はこれからで、先行きは未だに不明であるが、「教養学科」の名称は廃止されそうである。

他方、前期課程はすでにカリキュラムが変わり、これと同時に人文科学科や人文地理学教室は制度上廃止される。しかし廃止後の運営組織はまだ検討中である。1963年に助手として参加した当時の人文科会にあった談論風発の雰囲気は失われ、大紛争当時の緊張も解けて、学部の中ではさまざまな新しい試みが進行している。だが先生方の表情には、はつらつとした改革の盛り上がり、あるいは新たな喜びが浮かんでこない。むしろ、疲労といらだちが見られる。大学全体に制度疲労の進行を感じるのも、2年後に定年を迎える年のせいかな。

この変革期に、また山口教授の病臥と田辺の派遣中にあって、谷内教授が人文科学科人文地理学教室主任と教養学科人文地理学学科主任を引き受け、前号の発行直後に着任された荒井助教授とともに教育・研究・改革などに尽力された。助手人事としては、平成5年4月1日付けで、小林正夫助手が東洋大学専任講師として転出し、後任として須貝俊彦助手が着任した。また永田淳嗣助手が平成6年10月から2年間の予定でマレーシアに出発した。両助手は、助手在任中とともに理学博士の学位を受けた。駒場の助手はレベルが高いということで、短期に引

き抜かれる場合が多く、現役の助手として学位論文を取ったのは1966年以後のことである。

平成5年8月1日付で田辺が職務に復帰し、同年10月から教室主任、6年10月から人文科学科科長となり断末魔の人文科学科と教室とを各専攻・系などに軟着陸させるべく試みているが、まだ首尾は分からない。谷内教授には引き続き分科主任を、また荒井助教授には平成5年4月から2年間、駒場から出る最後の大学院理学研究科委員をお願いしている。小世帯なため、学内委員として、他にも荒井助教授は、大学院学務委員、計算機関係の各種委員、教養学科カリキュラム委員、谷内教授は総合資料館運営委員、自然科学博物館委員、予算委員、田辺は2号館主任、国際交流委員、科長に付随する総務委員や防災委員など、各教官は信じられないほどにがんばっている。とりわけ事務の渋谷桂子嬢の活躍が大きく寄与した。

年間3827人(1994年度)の前期学生が受講し、毎年学士(5人,1994年度)、修士(6人,同)、博士(2人,同)を育てる独立した研究教育単位として、我が教室の教授・助教授が合計3名とは、しかも東大の他部局に同じ専門の教官が一人も居ないという状況で、人文地理学教室は、全国立大学の中でもっとも苛酷な研究・教育条件下にあるとあって良い。教室運営がcaろうじて可能であったのは、献身的な非常勤講師の先生方や助手・事務職員・学生・院生・卒業生の助力があったからこそである。われわれも、諸大学に教授・助教授を送り、外交官試験や司法官試験をパスしたり、中央官庁の局長などを輩出するなど、日本で唯一の人文地理学教室であるという矜持に支えられてやってきたというのが実状である。在任がもっとも長かったにも関わらず、30年あまりの間、ついに教授・助教授の増員を一人も得られなかった非力を同僚・後輩にわびるのみである。

なお、一応の区切りとして、本誌創刊以来の論文総目録、人文地理学学科創設以来の全卒業論文・修士論文・博士論文の目録を掲げる。修士・博士の目録は、当初は、駒場の教官が指導教官・主査であったもののみが掲載されていたが、木内先生退官記念号の第4号が発行された1972年以後、東京大学の理学系地理学専攻に提出された全人文地理学系論文が記載されるようになった。実際、理学部・経済学部・東洋文化研究所においてだった人文地理学の先生方は、現在ではいずれも退官され、すべての人文地理学を専攻する院生が駒場の教官を指導教官としている。また制度改正以降の、1995年3月修了の修士・博士については、総合文化研究科広域科学専攻広域システム科学系と、理学研究科地理学専攻とに提出された論文のうち、人文地理学教室教官が指導教官・主査であったものを収録することとした。

遅い東京の初雪の日に

田 邊 裕